

■震災語り部の思い心に

池本 章 58歳

(札幌市・会社役員)

今月上旬、宮城県南三陸町のホテル観洋に勤める伊藤俊さんから「仕事で北海道に来る」とメールがあり、札幌市で再会しました。

札幌で少年消防クラブの指導者をしている私は昨年夏、南三陸町で開かれた「全国少年消防クラブ交流会」に参加。震災を風化させないための「語り部バス」の語り部をしていた伊藤さんと親しくなったのです。

伊藤さんの語り部の活動は通算200回を超えたとのこと。献身的な働きに頭が下がりました。また、「北海道の方はとても温かい」と、エピソードを話してくれました。

ある時、語り部バスに乗

車したJA新すながわ（北海道砂川市）の皆さんが、被災地を回るバスの中でお金を集めだしたそうです。そして、伊藤さんに「何かの役に立ててください」と手渡してくれたのです。伊藤さんは「気持ちのこもった行動に感動した」と言っていました。私もうれしくなりました。

震災遺構として保存されている南三陸町防災対策庁舎が、周りの土地のかさ上げで見えなくなってきたおり、震災の記憶が薄らいでいくのではないかと、伊藤さんは懸念していました。

私は、南三陸町で聞いた伊藤さんの話を、これから多くの人に伝えていきま